

公益財団法人 サントリー芸術財団 音楽事業部

107-6019 東京都港区赤坂1-12-32 アーク森ビル19階 私書箱509号 Tel: 03-3582-1355 Fax: 03-3582-1350

Nosfa0064 (2025.3.24)

**第24回（2024年度）佐治敬三賞は
「山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-」
「田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界」
に決定**



公益財団法人サントリー芸術財団（代表理事・堤 剛、鳥井信吾）は、わが国で実施された音楽を主体とする公演の中から、チャレンジ精神に満ちた企画でかつ公演成果の水準の高いすぐれた公演に贈る「佐治敬三賞」の第24回（2024年度）受賞公演を「山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-」と「田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界」の2公演に決定しました。後日贈賞式を予定しています。

●選考経過

応募のあった2024年実施公演について2025年1月26日（日）当財団会議室にて選考会を開催。慎重な審議の結果、第24回（2024年度）佐治敬三賞に「山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-」と「田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界」が選定され、3月17日（月）の理事会において正式に決定された。

●賞金 200万円 今回は同時受賞につき各100万円が贈られる。

●選考委員は下記の9氏

浅井佑太、伊藤制子、岡田暁生、小室敬幸、白石美雪、長木誠司、
沼野雄司、野々村禎彦、水野みか子（敬称略・50音順）

●受賞公演

「山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-」

<公演概要>

日 時:

(プログラムA)

2024年1月26日(金) 19:00開演/1月27日(土) 15:00開演

(プログラムB)

2024年1月27日(土) 19:00開演/1月28日(日) 15:00開演

会 場: アトリエ第Q藝術 (東京・世田谷区)

出 演: 山本昌史 (コントラバス)

曲 目:

(プログラムA)

ジョン・ケージ / 《The Wonderful Widow of Eighteen Springs》

一柳慧 / 《空間の生成》

森田泰之進 / 《速驚曲第3番》※山本昌史委嘱作品/初演

木下正道 / 《石をつむIX》※山本昌史委嘱作品/初演

ジェイコブ・ドラックマン / 《Valentine》

フィリップ・ボアヴァン / 《ZAB ou la Passion selon Saint-Nectaire》

※日本初演

(プログラムB)

高木日向子 / 《Lost in ____ VI》※山本昌史委嘱作品

藤倉大 / 《Bis》

森田泰之進 / 《速驚曲第3番》

木下正道 / 《石をつむIX》

ヤン・ロバン / 《Myst》※日本初演

フィリップ・ボアヴァン / 《ZAB ou la Passion selon Saint-Nectaire》

主 催: 山本昌史

「田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界」

<公演概要>

日 時: 2024年12月7日(土) 18:00開演

会 場: 晴れたら空に豆まいて (東京・渋谷区)

出 演: 田中悠美子 (義太夫三味線)

内橋和久（ギター／ダクソフォン）

New Little One（スガダイローPf. 細井徳太郎 Gt. 秋元修 Dr.）

安達楓（DJ）

曲 目：

高橋悠治／《われを頼めて来ぬ男》梁塵秘抄による

藤倉大／《Jiai（慈愛／地合）》義太夫三味線のための※田中悠美子委嘱作品／
初演

一ノ瀬響／《心の澄むものは》梁塵秘抄より

即興演奏 with 内橋和久

Plays セロニアス・モンク with New Little One

田中悠美子／《I was here》※初演

（開演前・転換・終演時）

Listening Style DJ by 安達楓『録られた音響世界を聴く』

企画・主催：田中悠美子

<贈賞理由>

「山本昌史コントラバス・ソロ-The Unplugged Theatre-」

山本昌史はコントラバス奏者という立場を超え、現代の作曲界をグローバルな視野で捉えながら、他の演奏家たちの視野になかなか入らない作曲家の作品を採り上げて、それらを見ごとなパフォーマンスで披露する。このひとがいるおかげで、ことに日本の現代音楽界は格段に広い地平と展望を得ている。2023年に神奈川県立音楽堂で催された「紅葉坂プロジェクト vol.2」では、ピエール・ジョドロフスキのライヴエレクトロニック作品に広い空間を用いて八面六臂の活劇的演奏を繰り広げた山本だったが、2024年1月のThe Unplugged Theatre（アンプラグド・シアター）は、それとは対照的なアトリエ第Q藝術というインティメットな空間で催された。3日間にわたり2つのプログラムで行われたこの演奏会は、凝縮された音と荒行的な演奏行為の数々によって、会場の空気の密度を破裂させんばかりに高め、聴衆を強度の興奮状態へと導いた。現代作品によるこのエクスタシーは近年では珍しいものだ。ジョン・ケージ、一柳慧、森田泰之進、木下正道、ジェイコブ・ドランクマン、フィリップ・ボアヴァンというAプログラムの並びを眺めただけでも、山本がこれまでのコントラバス奏者、あるいは現代作品奏者たちとは異なった角度、

それも「今」の仰角から音楽界を見つめていることが了解されよう。Bプログラムではケージ、一柳、ドラックマンの代わりに高木日向子、藤倉大、ヤン・ロバンの作品が入る。がたいの大きなコントラバスは、いろいろな「付き合い方」が可能な楽器だが、山本は通常奏法に秀でることは言うに及ばず、特殊奏法やばちを使った奏法、楽器を傾けたり裏返したりと言った挙動、打楽器的な扱い、声を伴いながらの演奏・・・あらゆる演奏行為を、あたかもそれがこの楽器本来の奏法であるかのように連続的にこなしながら、それぞれの奏法に緊張感を常駐させる。特殊奏法から見れば、通常奏法こそが「特殊」なのだ。その相対性のなかで、でもけっして演奏が平準化しないのは、ひとえに山本のパフォーマンスに漲る強度ゆえである。両プログラムの最後を飾る、長大なボアヴァン作品では、床一面に広げられた五線譜に従いながら、コントラバスという楽器との等身大の格闘技が繰り広げられる。まさに「プラグの外されたシアター」だ。ときに山本は楽器の影に隠れ、見えなくなり、また楽器との添い寝もする。演奏者と楽器と、どちらがこの芝居の主演なのか？ いやこれはむしろ「ふたり」の対等なデュオ。山本がコントラバスから音を引き出すと同時に、コントラバスが山本という人格を引き出している。そのチャレンジな楽器との相克は、まさに佐治敬三賞の精神に相応しい。

(長木誠司委員)

「田中悠美子リサイタル 2024～義太夫三味線の音響世界」

太棹三味線奏者田中悠美子の40年を超える活動の集大成にあたる公演である。彼女は高田和子を通じて高橋悠治《すががきくずし》《音楽のおしえ》の初演に参加し、高橋が高田らと始めた邦楽器グループ「糸」に加わった。本公演では《われを頼めて来ぬ男》の伝統譜を的確に音にしている。「糸」の委嘱を通じて知り合った一ノ瀬響とは交流が続き、シアターピース《KIYOH》(2010)を共作した。《心の澄むものは》は同日に初演されたネオポップ調の小品であり、三味線の伝統奏法では用いないハーモニクスが良いアクセントになっている。彼女は1990年代半ばから即興音楽に積極的に取り組み、大友良英のバンド Ground-Zero に加入して国際的に認知された。内橋和久とは同バンドの同僚として出会い、内橋が主宰した即興音楽祭 Festival Beyond Innocence の常連だった。内橋との即興が本公演の白眉であり、お互いの音楽性へのリスペクトにあふれた高密度かつ親密な25分の対話が受賞の原動力になった。活動の回顧にとどまらない新しい試みとして、彼女は本公演に向けて三味線曲の創作を続けている作曲家をリサーチし、藤倉大に《Jiai (慈愛／地合)》を委嘱した。田中がオンライン意見交換で伝統曲の暗さを強調した結果、藤倉には珍しい“真っ暗な”曲になった。また、不定形の即興音楽とは対照的な「形のある即興」としてジャズにも取り組んだ。三味線以前に親しんでいたピアノ／

邦楽器奏者と日常的に共演／ジャズの形式にこだわらないフリーな音楽性、と条件を挙げてゆくと共演者はスガダイローに絞られ、彼が率いるトリオとセロニアス・モンクの曲をカバーすることになった。初顔合わせなので課題も残ったが、内橋との即興では封印していた義太夫の古典を自在に引用するプレイを持ち込み、別角度の評価が上積みされた。なお最後の自作曲《I was here》では伝統奏法に囚われずに楽器固有の音響を引き出し、この音響への愛ゆえに大学からこの楽器に転じた来歴も含めた語り芸として公演を締め括った。

今回の選考では応募公演が短い期間に集中したため視察者も推薦票も割れ、議論の過程で推薦を取り下げた委員が映像資料を参照して未視察の公演に支持を集約してゆく、異例の展開になった。その中で、多様な方向性を高水準で並べた田中の支持が増えてゆき、受賞に至った。彼女のキャラクターに由来する和やかな雰囲気も、長時間の選考過程ではプラスに働いたかもしれない。同様に支持を集めた山本昌史のソロ公演とどちらを選ぶかが最後に議論になったが、現代音楽／現代邦楽を含む伝統的な活動から出発し、しだいに即興音楽に活動の幅を広げていった田中と、ジャズロックのエレキベース奏者として出発し、メインバンドの NATSUMEN では海外公演やフジロックフェスティバルにも出演していた山本が、活動の幅を広げるためにウッドベースに取り組むうちに、現代コントラバス作品に重心を置くようになった歩みは相補的であり、むしろ両公演に積極的に同時贈賞することが、本賞の評価軸の幅広さを示すことにもなるという提案に全委員が賛同した。

(野々村禎彦委員)

〔ニュースリリースに関するお問い合わせ・広報用画像お申し込み〕

公益財団法人サントリー芸術財団 音楽事業部

ongakujigyo@suntory.co.jp

TEL : 03-3582-1355 (平日10:00~17:00)

FAX : 03-3582-1350

以 上

(ご参考)

佐治敬三賞について

公益財団法人サントリー芸術財団(代表理事・堤 剛、鳥井信吾)は、故・佐治敬三(サントリー元会長、サントリー音楽財団元理事長)の功績を記念して、2001年度(平成13年度)から「佐治敬三賞」を創設しました。

この「佐治敬三賞」は佐治の音楽への深い愛情と理解およびチャレンジ精神、パイオニア精神を承継し、新しい世紀のわが国における音楽公演活動の一層の振興を願って、氏の名を冠した新しい賞として制定されました。

この賞は、毎年わが国で実施された音楽を主体とする公演の中から、チャレンジ精神に満ちた企画でかつ公演成果の水準の高いすぐれた公演に贈られるもので、応募のあったものの中から選定されます。賞金は200万円です。

故・佐治敬三は、早くから文化事業への支援に力を入れ、特に音楽界においては1969年(昭和44年)に鳥井音楽財団(現サントリー芸術財団)を設立、サントリー音楽賞をはじめとするわが国の洋楽の振興を目的とした諸事業のほか、東京初のコンサート専用ホール「サントリーホール」の建設・運営などを行ってきました。

1999年11月3日に急逝した佐治の遺族から“音楽界のために役立ててほしい”として遺産の一部が寄付されたことから、当財団で検討した結果、「佐治敬三賞」の創設にいたしました。

これまでの受賞公演

第1回(2001年度)

「篠崎史子 ハープの個展 VIII ～新たな領域を求めて～」

2001年10月19日 東京文化会館 小ホール

「Just Composed 2001 in Yokohama ～現代作曲家シリーズ

～大野和士が描く新世紀の音楽絵巻」

2001年8月31日 横浜みなとみらいホール

第2回(2002年度)

「アンサンブル・ノマド2002年度定期演奏会#1」

2002年9月17日 東京オペラシティ リサイタルホール

第3回(2003年度)

「現代の音楽展2003 室内オーケストラの領域 III」

2003年3月17日 東京文化会館 小ホール

第4回（2004年度）

「三井の晩鐘」

2004年10月24日 イシハラホール

第5回（2005年度）

「next mushroom promotion vol. 8 『細川俊夫～50年のランドスケープ』」

2005年10月15日 ムラマツリサイタルホール新大阪

第6回（2006年度）

「武生国際音楽祭2006」

2006年9月2日～10日 越前市文化センター 他

第7回（2007年度）

「フランス現代音楽からの潮流～井上麻子×藤井快哉DUO」

2007年11月17日 兵庫県立尼崎青少年創造劇場 ピッコロシアター

第8回（2008年度）

「実験室 vol.2 『偽のアルレッキーノ／カンパネッロ』」

2008年3月27日・28日 ミレニアムホール

第9回（2009年度）

「クロノイ・プロトイ 第5回作品展～弦楽四重奏の可能性」

2009年12月9日 東京オペラシティ リサイタルホール

第10回（2010年度）

「井上郷子^{きょうこ}ピアノリサイタル#19 モートン・フェルドマン作品集」

2010年2月28日 東京オペラシティ リサイタルホール

「東京シンフォニエッタ第28回定期演奏会 湯浅譲二特集」

2010年12月10日 東京文化会館 小ホール

第11回（2011年度）

「林千恵子メゾソプラノ・リサイタル『アペルギス&グロボカール』」

2011年7月27日 門仲天井ホール

「児玉桃ピアノ・ファンタジーvol.1」

2011年9月17日 京都府立府民ホール “アルティ”

2011年9月19日 東京文化会館 小ホール

第12回（2012年度）

「kuniko plays reich in Kyoto」

2012年3月18日 京都芸術センター 講堂

「Sep.5 2012 Thanks to John Cage」

2012年9月5日 サントリーホール ブルーローズ

第13回（2013年度）

「東京現音計画#01～イタリア特集I:」

コンポーザーズセレクション1・杉山洋一」

2013年9月13日 杉並公会堂 小ホール

「^{とうほうきたん}東方綺譚 “Nouvelles Orientales de Marguerite Yourcenar”」

2013年10月26日 津田ホール

第14回（2014年度）

「鈴木俊哉 リコーダー リサイタル《細川俊夫ポートレート》」

2014年2月11日 淀橋教会・小原記念チャペル

「ニンフェアール第10回公演 東洋と西洋の絃」

2014年7月20日 宗次ホール

第15回（2015年度）

「トム・ジョンソン《4音オペラ》」

2015年3月25日 杉並公会堂 小ホール

2015年3月28日 愛知県芸術劇場 小ホール

「DUOうたほぎリサイタル2015－春夏秋冬－」

2015年12月17日 東京オペラシティ 近江楽堂

2015年12月23日 青山音楽記念館 バロックザール（京都）

第16回（2016年度）

「伶楽舎第十三回雅楽演奏会～武満徹『秋庭歌一具』」

2016年11月30日 東京オペラシティ コンサートホール

第17回（2017年度）

「三輪眞弘+前田真二郎 モノログ・オペラ『新しい時代』」

2017年12月8日・9日 愛知県芸術劇場小ホール

2017年12月16日 あいおいニッセイ同和損保ザ・フェニックスホール

第18回（2018年度）

「第三回 伊左治直 個展 ～南蛮劇場」

2018年12月2日 求道会館（東京都文京区）

第19回（2019年度）

「THE 鍵 KEY（ザ キー）」

2019年5月19日・25日・26日

旧平櫛田中邸アトリエ（東京都台東区）

第20回（2020年度）

「ペルセポリス ～秋吉台で聴くテープ音楽～」

2020年9月5日 秋吉台国際芸術村 ホールおよび中庭

「ぎふ未来音楽展2020 三輪眞弘祭 一清められた夜」

2020年9月19日 サラマンカホールよりライブ配信

第21回（2021年度）

「オーケストラ・ニッポニカ第38回演奏会 松村禎三交響作品展」

2021年7月18日 紀尾井ホール

「オペラ『ロミオがジュリエット』世界初演」

2021年11月5日・6日・7日 THEATRE E9 KYOTO

第22回（2022年度）

「北村朋幹 20世紀のピアノ作品

（ジョン・ケージと20世紀の邦人ピアノ作品）」

2022年10月8日 滋賀県立美術館 エントランスロビー

10月9日 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 小ホール

第23回（2023年度）

「サウンドパフォーマンス・プラットフォーム特別公演

安野太郎ゾンビ音楽『大霊廟IV—音楽崩壊—』」

2023年10月14日・15日 愛知県芸術劇場 小ホール

第25回（2025年度）「佐治敬三賞」下期公演応募について

2025年1～6月実施公演の応募受付は終了しました。

2025年7～12月実施公演の応募方法は以下のとおりです。

- ・対象公演 2025年7月1日から12月31日の間に国内で実施される音楽を主体とする公演。
- ・応募方法 所定の応募用紙にて応募いただきます。公演の記録映像、録音、印刷物などがある場合は資料として提出いただく場合があります。応募要項・用紙は、当財団ホームページからダウンロード下さい。
<https://www.suntory.co.jp/sfa/music/saji/entry.html>
- ・応募締切 2025年4月30日（水）
- ・お問合せ先 公益財団法人サントリー芸術財団 音楽事業部
ongakujigyo@suntory.co.jp
TEL：03-3582-1355
（平日10：00～17：00）
FAX：03-3582-1350

以 上